BRAIN and NERVE 66(1)：80-83，2014

学会印象記

第21回世界神経学会議

（2013年9月21～26日，ウィーン）

松本理器[1)]，髙橋良輔[2)]，水澤英洋[3)]

初秋のウィーンにて第21回世界神経学会議（World Congress of Neurology：WCN 2013）が9月21～26日に開催された。欧州神経学会議（Europeau Federation of Neurological Societies：EFNS congress）と同時開催であったが，欧州のみならず世界135カ国から，6,300名を超える神経内科医が集まった。会場のメッセウィーン国際会議場はウィーンの中心部からも近く十分な広さがあり，最先端のIT設備を有していた。Plenaryとして，ウィーン出身のノーベル生理学・医学賞を受賞したEric Kandel先生の基調講演をはじめ，Angela Vincent先生の自己免疫介在性中枢神経疾患に関する話題などup-to-dateの招待講演が，数千人は収容できる大ホールでなされた。また，脳卒中，運動異常症，多発性硬化症，てんかん，認知症など日ごとに特集を組んだシンポジウムや多数の教育プログラムが用意され，学術的に実りのある学会であった。ソーシャル・プログラムについても，楽友協会を貸し切っての神経内科医指揮による音楽会，Hachinski理事長作曲のワルツの演奏と充実しており，オーストリア神経学会主催ならではの催しであった。

特に日本神経学会にとっては，2017年開催予定の第23回世界神経学会議（WCN 2017）の京都への招致が決まり，忘れられない歴史的な学会となった。日本神経学会は1981年に第12回世界神経学会議を京都で開催しており，2回目の招致には大変な困難が予想されたが，水澤英洋代表理事の強力なリーダーシップのもと，国際対応委員会を中心に日本神経学会が1つになって招致活動を進めた結果，今回の招致決定に至った。これまでのWCNの歴史上，2回開催された都市はロンドン（1935年，2001年），ウィーン（1965年，2013年）の2都市のみであり，京都での2017年の大会は，学会史上最も短い間隔での2回目開催となり，欧州外では初めての快挙となった。

筆者は，日本神経学会の国際対応委員会幹事の立場で，一連のWCN 2017招致活動に携わる機会を得た。今回の学会印象記では，いつもと異なる構成となるが，編集部からのお勧めもあり，WCN 2017京都開催決定に至るまでの招致活動について紹介する。

WCN 2017京都開催への立候補表明

WCN 2017を再度日本（京都）に招致する方針の決定は，公式には第52回日本神経学会学術大会（2011年5月，名古屋）での国際対応委員会に遡る。日本神経学会の国際化を目指す一環として，アジアで開催が予定されるWCN 2017を京都に招致する方針が決められ，国際対応委員会の拡充が図られた。2011年11月にモロッコのマラケシュで開催されたWCN 2011では，ソウルが既に開催地として立候補を表明しており，ブースを出展しKorean Nightを開催していた。2012年6月メルボルンでのアジア・オセアニア神経学会議（AOCN）では，われわれもWCN 2017 Kyotoブースの出展を行い，世界神経学会の誘致表明を行った。多数の参加者がブースを訪れ，用意した舞妓バッジなどのgiveaway（小物土産）が好評で，われわれが着るために用意したハッピまでお持ち帰りいただくハプニングもみられたほどであった。

1）京都大学大学院医学研究科てんかん・運動異常生理学〔〒606-8507　京都府京都市左京区聖護院川原町54〕
2）京都大学大学院医学研究科臨床神経学
3）東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科脳神経病態学（神経内科）分野

写真1　世界神経学会役員による京都視察（2012年11月19日）
Raad　Shakir財務担当理事（当時），Werner　Hacke第一副理事長（当時），Daniela Dremanケネス（WCN運営企業）担当役員と日本神経学会役員・京都チームとの記念撮影。宝ヶ池のグランドプリンスホテル京都にて。

アジア・オセアニア神経学会（AOFN）の総会で，誘致表明を行っている日本と韓国がプレゼンテーションを行い開催都市について協議する予定であった。総会では，香港・中国が突如，誘致表明をしたにもかかわらず，プレゼンテーションの準備はないとのことで，韓国がプレゼンテーションの中止を主張し，開催都市に関する協議は残念ながら行われないことになった。

2012年8月の正式な立候補表明（誘致提案書提出）で，2017年のアジアでの開催地の候補は，ソウル，香港，そして京都の3都市に絞られた。9月にストックホルムで世界神経学会（World Federation of Neurology：WFN）の総会があり，AOFNとしての協議の可能性を提案したが，韓国ならびに香港・中国からは特に希望はなくAOFNの会議は開催されなかった。

同年11月には，WFN役員・関係者3名からなる視察団が京都を訪れた（**写真1**）。水澤代表理事，髙橋良輔国際対応委員長をはじめとする神経学会役員団と京都チーム（京都国際会議場，京都文化交流コンベンションビューロー，日本政府観光局，ホテル，旅行会社など）の一丸となった対応のおかげで，学会会場・懇親会会場などの視察がスムーズに進行した。学会場の設備・費用や京都市の支援体制に関しては宿題を頂戴したが，視察自体にはご満足いただいて，次の視察地ソウルへと視察団を無事送り出すことができた。

広く細やかな招致活動

2013年に入り，WCN 2017の招致活動用の英文フライヤーと紹介スライドを作成し，国際対応委員を中心に神経学会の全会員にも呼びかけて，各種国際学会でのフライヤー配布や講演での紹介を行っていただき，日本神経学会の京都開催の意思表明を全世界に向けて発信した。

このように全般的に招致の雰囲気を醸し出す努力を続けるとともに，最終的な候補地選定で選挙権を持つのは，WFNに加盟している112カ国の各国代議員（WFN delegate）であるため，個々の代議員へ日本支持の働きかけを行った。海外の名誉会員の先生，そして外国の学会の幹部クラスの先生と親しい，国際的に活躍されている先生方にお願いしたところ，ご多忙中にもかかわらず多数の先生に二つ返事でお引き受けいただいた。また，中堅の先生方にも，国際学会で初対面のWFN delegateに積極的に働きかけをしていただき，これらの地道なロビー活動が投票日の支持につながったと実感する。

5月の第54回日本神経学会学術大会では，大会長を務めた水澤代表理事の発案でJSN-WFN/Asia　Initiative Joint Symposiumを開催し，WFN役員やアジア・アフリカ・中南米の有力代議員を大会にお招きし，日本神経学会の学術大会を経験していただくとともに，

写真2　Japan Nightでの懇親風景（2013年9月21日夜，Grand Hotel Wien）

世界における神経学をいかに発展させるかについて議論を深め大変有意義であった。このシンポジウムはWFNから高く評価され世界神経学会ニュースレター（『World　Neurology』）に紹介記事が掲載された。『World Neurology』8月号には，日本を含め3カ国の立候補表明文が掲載されいよいよ招致活動も大詰めを迎えた（http://www.worldneurologyonline.com/article/come-to-kyoto-japan-in-2017/）。WCN　2013ウィーン大会直前には，各国の代議員に水澤代表理事直筆の支持依頼文，Japan Nightの招待状，そして安倍首相や厚生労働大臣の招請状を電子メール・郵便で送付し，最後のお願いを行った。

Japan Night

このように，髙橋委員長のもと国際対応委員会としてはできる限りの準備を行い，WCN 2013ウィーン大会に挑んだ。実質的な大会初日である22日午前中に世界神経学会総会でWCN 2017開催地の選挙が行われるため，前日の晩に，ウィーンで唯一日本食を用意できるGrand Hotel Wienで，Japan Nightを開催した（**写真2**）。大会直前に日本神経学会メーリングリストで，会場でおもてなしいただく参加者を募ったところ，シニアの先生からレジデントの先生まで，50名を超える先生方からお返事をいただいた。会場の広さの問題から，一部の方々はご参加をお断りしなければならず，心苦しい限りであったが，同時に学会員の国際化への熱い想いを肌で感じることができた。

Japan Nightには，22カ国から代議員が出席され，日本食・日本酒を楽しみながら，現地日本人ボランティアの森本雅美様による着物姿でのお琴の演奏，書道パフォーマンスを楽しんでいただいた。また着任されたばかりの竹歳　誠在オーストリア日本大使には情熱あふれるスピーチをいただき，駆けつけてくださったWCNウィーン大会会長Auff先生，日本神経学会名誉会員のPoewe先生，次期WCNチリ大会会長Verdugo先生，AOFN会長Mehndiratta先生からも励ましのお言葉を頂戴した。Japan Night当日の夕刻に到着された先生もお疲れのところ多数参加くださり，学会員一丸となって心のこもったおもてなしができ，われわれの熱意が十分に通じたパーティーとなった。

最後のお願い

大会初日の9月22日は，それまで続いていた小雨がやみ，大変よい天気に恵まれた。午前9時からのWFN総会前に最後のお願いを行うべく，6時30分の会議場の開門と同時に，髙橋委員長はじめ学会員有志で総会会場入り口前のベストポジションを確保した。この日のために，京都の小物土産とともに，京都で舞妓さんが贔屓のお客に配る舞妓うちわの神経学会特製版を用意した。他の立候補国はそれぞれの民族衣装を纏っての応援（韓国はチマチョゴリ，香港はチャイナドレスでの中国琴演奏）を行い，われわれは，日本政府観光局がご厚意で用意くださった上品な朱色のハッピを着て，また有志の女性陣は着物姿で，集まった40名を超える学会員一丸と

写真 3　世界神経学会総会前の最後の招致活動風景（2013 年 9 月 22 日朝，総会会場前）

なって最後のお願いをした（**写真 3**）。

9 時からの総会では，役員立候補者の演説の後，WCN 2017 立候補国の演説の順番が回ってきた。日本のプレゼンテーションは，水澤代表理事から，(1)大震災における各国の援助へのお礼，(2)日本神経学会の歴史，アジアの神経学発展への貢献の実績，(3)日本が WCN 2017 を開催したい理由（①超高齢社会，環境問題，災害医療など，日本の経験を世界と共有すること，②実質的には日本一国でなく，アジア・オセアニアによって行われる学会にすること，③日本が先導する iPS 細胞など革新的先端技術による神経学の新たな展開を伝えること），(4)日本および京都の魅力をスライドとビデオで訴える，という構成でなされた。

水澤先生は堂々とした態度と落ち着いた口調でありながら，強い熱意を感じさせるプレゼンテーションをされて，前半の真摯なところ，後半の笑いがこぼれるようなやわらかいところをうまく使い分けられて，大変メリハリの利いた演説をされた。ビデオは，いわゆるオリエンタリズムや和風なものだけではなく，現在の美しい日本，京都を軽快に，かつ印象的に感じられるように構成され，図らずも東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会のプロモーションビデオのようなアップテンポのものとなった。大会場のビデオ上映は，映像も音楽も大変効果的で，ビデオの最後では自然と拍手が起こるほどで，わずか 3 分弱で，聴衆の心を確かにつかむことができた。ライバルの香港，ソウルも，それぞれに特色を打ち出したプレゼンテーションを行った。

WCN 2017 京都開催決定

1 回目の投票で候補地が京都とソウルに絞られ，2 回目の決選投票で京都に決定した。2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催決定の追い風を受け，日本で本学会を含めて 3 件の大型国際学会招致が決定し，日本政府観光局からプレスリリースがなされた（http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/130926_convention.pdf）。

直前に 2 回目の東京オリンピック・パラリンピックの招致に成功したという機運もわれわれに味方をしてくれたが，一連の招致活動を振り返ると，これまで日本神経学会の先達が培ってこられた「国際力」「信頼関係」が今回の招致につながったと実感された。また，Japan Night での中南米のある代議員の「水害で失われた多くの橋を日本が再建してくれた。日本に投票する以外の選択肢は考えられない」とのお言葉にあるように，日本による長年の国際貢献の重要性も再認識された。

ほんとうに多くの先生方が学会の将来のために骨身を惜しまず働いてくださったことに心から感謝申し上げたい。WCN 2017 への道のりは，これからが本番であるが，大会の準備活動が日本神経学会のさらなる国際化に貢献するものになれば，招致活動をお手伝いさせていただいた者としては望外の喜びである。最後に，2 年にわたる招致活動をサポートくださった日本コンベンションサービス池田ゆかり様，招致活動の節目でご尽力くださった日本政府観光局川崎悦子マネージャーの両氏に厚く御礼申し上げる次第である。